

第3期「確かな学力育成プラン」検討委員会 議事録（第4回検討委員会）

◆日時 令和4年12月7日（木）午後2時から

◆場所 上杉分庁舎 12階 第1会議室

◆出席委員

氏名	現職等	備考
児玉 忠	宮城教育大学 教授	委員長
稲垣 忠	東北学院大学 教授	副委員長
我妻 良行	片平丁小学校 校長	
鹿野恵美子	東六番丁小学校支援地域本部 スーパーバイザー	
齋藤 孝志	株式会社サイコー 代表取締役	欠席
齋藤 亘弘	八乙女中学校 校長	
佐々木 大	INTILAQ 東北イノベーションセンター長	
佐藤 真奈	仙台市PTA協議会 副会長	
千葉 恵美	仙台市PTA協議会 副会長	

◆配付資料

- ① 第3期「確かな学力育成プラン」第4回検討委員会 次第
- ② パブリックコメントの実施について
- ③ パブリックコメントで寄せられた意見と本市教育委員会の考え方について
- ④ 仙台市確かな学力育成プラン2023 最終案素案
- ⑤ 仙台市確かな学力育成プラン2023 概要版素案
- ⑥ 第3期「確かな学力育成プラン」第3回検討委員会 議事録

◆会議概要

1 開 会

2 学校教育部部长挨拶

3 報 告・協 議

- ① 「仙台市確かな学力育成プラン2023」中間案に関するパブリックコメントについて
- ② 「仙台市確かな学力育成プラン2023」最終案に向けて

① 「仙台市確かな学力育成プラン2023」中間案に関するパブリックコメントについて

児玉委員長：パブリックコメントを受けた最終の詰めの段階に入りますので、皆さんの活発な議論をお願いしたい。仙台市確かな学力育成プラン2023の中間案に関するパブリックコメントについて事務局から、報告をお願いしたい。

事務局より中間案のパブリックコメントについて報告（木村主任指導主事 以下 木村主任）

児玉委員長：ただいまの事務局からのパブリックコメントの報告に関して、あるいは、資料の中にあるパブリックコメントについて、気付いた点などをご指摘ください。

佐々木委員：質問です。今回、意見が27件だったが、これは、パブリックコメントとしては多い方か、それとも少ない方か。

木村主任：5年前と比べると、少なかった。

丸山主幹：補足するが、検討委員の皆様からの意見、教育委員会からの意見、市役所各課からの意見などもいただいている。修正はしているが、それはパブリックコメントの件数には入れていない。実際には多くの意見をいただいているということになる。

佐々木委員：かなり踏み込んだ内容の意見が多いので、一般市民というよりは教育関係者や児童館の関係者等、関心の高い人なのかという印象を受けた。実際のところどういった人からの意見が多いのか。

木村主任：意見には、居住区、年代、お名前を書いているが、職業の記載は求めている。自身が携わる部分、関心のある所で意見を寄せられていると思う。

児玉委員長：個々の意見に関してではなく、パブリックコメント全体に関わる質問でした。こういった質問でも構わないので、自由に発言ください。

稲垣副委員長：パブリックコメントの番号7～9番のところに関して、「現在のところ若干の優位性が見られる可能性がある」という部分について、統計的な「有意性」だと思うので表記について確認願う。また、様々な調査を行っていると思うが、結果に関係性が見えなければ、「ない」と公表すべきと考える。細かい意見をいただいているので、結果についてはしっかりと精査すべきと思う。番号15、夢を持ってない、将来が描けないといった御意見で、キャリアパスポートのことがあるが、本編の27～28ページにキャリアパスポートの記載がほとんどない。きちんと対応しているか、最終的にしっかりと点検を行っていただきたい。番号17、「たく生き」についての意見があった。現場の先生が書かれたのではないと思うが、現在の「たく生き」の大きな問題点だと考えている。1時間のプログラムをたくさん集めるということでスタートしたわけだが、学習指導要領自体が、「たく生き」の内容に踏み込んだようなものになってきているので、それに対して、仙台市ではカリキュラムとしてどう提案していくのが大切と感じる。確かな学力育成プランに直接関わる部分ではないが、今後の「たく生き」を考えていく上で、非常に重要なコメントだと思う。最後に番号10、ICTの活用は個別最適な学びに関わるもので、きめ細かな指導の充実の中でも触れるべきという意見について。これについてはICTの役割が大きく変わってきていることを踏まえた方がいいと思う。先生方の指導力の一環としてのICTはもちろん大事だが、子どもたちの学びを保障するインフラとしてICTを使っていこうという部分が出てきている。その部分は少し検討した方がいいのではないと思う。

我妻委員：特に、自分づくり教育の充実に取り組んでいくところが明確になって、前面に押し出されている部分はとても良いような気がする。この自分づくり教育を充実していくために、どのような流れで、どのようなイメージで充実させていくかが、「仙台自分づくりノート」の大切な部分になると思う。「A仙台自分づくり教育の充実」のリード文の2ページの中で、それがイメージできるようになっていると良い。自分づくりノートをどう位置付けるか、まずは「たく生き」なのか、順序なども意識しながら、今回の育成プランで目指すところが明確になってくるといいのではないと思う。現場で取り組む方としても、そのイメージを共有して浸透していくのを実感できればいいと思う。「たく生き」についてももう少しはっきりしてもいいと感じる。授業プランの提示だけでなく、カリキュラムなども考える時期なのではないかと思う。仙台版スタンダードカリキュラムなどもあるので、そこに意図的に明示していくのも可能なのではないかと感じた。「遊び」の意見を見て、現在は校庭の開放ができないなど制約もあるが、「遊び」をどのようにしていくかというのはいい視点だと思う。幼稚園との連携については、情報交換のレベルではなく、その教育を引き継ぐ、育んだ力をつなぐといった視点で考えると、もう少し明確な連携が可能になるのではないと思う。

児玉委員長：番号 15、キャリアパスポートのところ、「今をどう生きるか」ということに対して、もう少し配慮があってもいいのではないかということであるが、なるほどその通りだと思った。「将来、夢を見よう」「頑張っていることを見よう」といったことは確かに出ていく感じがする。小学生が社会とどう関わるか、中学生はどう社会と関わってみたいか、人の役に立ってみたいか、その年代の社会との関わりを具体化することによって、それを起点にしながら将来のイメージを考えていく。未来から現在を見るだけでなく、現在から未来を見るような双方向のものがあってもいいと感じた。番号 26 の一行目、「コロナ禍によって子どもの年齢に応じた発達は停滞している」という意見が気になった。言われてみれば、大学生も社会経験がすごく少なく、就活でも大学時代に頑張ったことが答えられないということがマスコミでも話題になった。その年代で獲得しておくべきいろいろな能力や経験が欠けているということで、それがこの意見の言葉を使えば、「発達は停滞している」ということになったのではないかと思う。そうであれば、今回の育成プラン 2023 の全体的な基調として、「アフターコロナ」「With コロナ」として、どう取り組むのかということが、大きな意識として我々に求められているのだということを一言入れておいたらどうかと思う。全体として、コロナ禍で、その失われた時間を子どもたちにどう回復させていくかっていうことを、喫緊の課題として意識したら良いのではないかと思う。

齋藤(巨)委員：プランを作成するにあたって、プランの扱う範囲がどこまでかが難しいと感じた。例えば、子ども未来局の施策の部分とどこまで連携すると言っているのか、もしかすると市民の方々は、その扱い範囲が分かりづらいところなので、そういった部分に「踏み込んでいない」「ちょっと足りない」と感じるのではないかと思う。ICT に関しては、学習環境の部分でも扱った方が良いのではないかと感じた。本校でも、別室登校の子どもたちの ICT 活用が課題と思っているので、そういったところも記載があると良いのではないかと思う。コロナ禍については、地域との連携も制限があってなかなかできなかった部分である。そう辺の分析とか今後の見通しみたいところで、研究も必要でないかと、皆さんのお話を聞きながら考えていた。

佐々木委員：「遊び」に関する意見には、新鮮な驚きがあった。「遊ぶ場」がないのか、「遊び方」を知らないのか、どちらなのだろうと思った。そこにつながるかもしれないが、「自分から何か楽しめることを探してみよう」とか「意欲や夢が持てない」という話があったことに関連して。私も起業家育成支援をやっているが、小中高大社会人まで、いろいろな方々と接する中で、特に最近、大学生や若手社会人と話す機会があって、彼らも本当に夢や希望が持てていない。日本の行く末に危機感を感じるが、高校生が社会人になったとしても、やってみたいことがないことが多い。社会のためとか大きなことでなくても良いから、「自分で興味があること」とか「何か取り組んでいること」とか何かないか聞くと、「そうでなければいけないのか。」と逆に返されるときもある。大人はみんな夢を持っていうけれど、自分だけじゃなく、周りも夢は持てないと言ってくるのがあって、何か突き刺さってくる。動物は子育てする時に、えさを取ってあげるのではなくて、そのとり方を教え、自分で生きていけるように育てると言われている。私たちがロールモデルをどんどん見せるのもいいが、何かその見つけ方、探し方といったことについて、足りないのではないかと、この意見を見て考えさせられた。私たちは、こういう人もいるのだし、こういった社会で活躍しているのだし、これを見て学ぼうといった感じで教えてきたが、それが当てはまるとも限らないわけだから、こんなやり方やこんな生き方、こんな遊び方が、いつか見つかってくるといったことが欠けていたのかと意見を見て思った。

児玉委員長：小学生は小学生なりに、中学生は中学生なりに社会と関わってみるということが良いかと思うが、その時に、他人と関わる、大人と関わる、地域と関わる、そして社会と関わりとスケールアップしていくプロセスが想定されている。ただ、その場を与えるだけでは多分足りないのだろう。「こんなふうやってみよう」と

か「誰かのお手伝いをしてみよう」、「何かのお手伝いをして役に立ってみましょう」とかそういったことがプログラムに入ってくるといいのかもしれない。

稲垣副委員長：「夢を持つこと」の話があったが、学校教育の中で、一番近いのは「探究学習」だと思う。高校の探究で「キャリア教育」が行われているわけだが、「自分がやってみたいこと」「自分が好きなこと」「自分が得意なこと」「自分らしさ」を見付けていくということである。小中学校の総合学習はどちらかという大きなテーマがあって、個別の探究はやっていない。指導の個別化と学習の個別化の二つが言われているが、学習の成果はまさに自分の好きなことを見付けていくという話なのだ、皆さんの意見を聞きながら考えた。

児玉委員長：自分づくり教育に関わるいくつかの議論は、今回のプランの肝の一つですから、引き続き我々で考えていかなければならないと思う。次の議論に移りたい。パブリックコメントを踏まえて、この最終案が現時点での教育委員会の考え方ということだと思うので、それを前提にまた議論したい。始めに、事務局から最終案について説明をお願いしたい。

②「仙台市確かな学力育成プラン 2023」最終案に向けて

事務局より最終報告案について報告（木村主任）

児玉委員長：委員の皆さんから、それぞれ関心があるところをお話しいただきたい。まず、稲垣副委員長に問題提起をお願いしたい。

稲垣副委員長：まず概要版からコメントする。

大きく二つある。一つは、第3章に記載があるICTの積極的な活用について、子どもたちの多様な学びと積極的な活用を図るという記載がある。これは仙台市の情報化推進方針の中で重点が置かれているもののうち二つ目のものが記載されていて、一つ目の情報活用能力についての記載がない。情報活用能力はコンピュータの活用のようなイメージが持たれがちだが、例えば環境学習を行って、情報をどうやって集めるか、あるいは集めた情報の信頼性をどう確かめるか、さらには情報モラルを守って、相手にどう伝えるかプレゼンテーションをすることなどが考えられる。教科横断で行っていくこととなっているものなので、その計画と整合性をとるよう確認してほしい。もう一つは、先ほどから議論になっている、「たくましく生きる力」の部分である。「確かな学力」との関係性をどうするか問題点であるが、実は概要版の文章を見ても、3か所違うことが書いてある。仙台自分づくり教育で目指すたくましく生きる力は、児童生徒の確かな学力を育成するための大切な要素と書いてある。ここは要素になっている。次のところは、本市における確かな学力の構成要素で、「基礎的知識・技能」「活用する力」「主体的な学習態度」、加えて「たくましく生きる力」が確かな学力育成の基盤となるという記載で、ここでは基盤になっている。要素と基盤ではだいぶ違う。こういった言葉の使い方、この二つがどういう関係なのかというのが、ねじれてしまっている状態になっている。最終的にそれが図になった時、どの文言が正確に対応しているのか、少し分からない状況になっている部分は、しっかりと解消しておいた方が良く思う。もう一つあげると、確かな学力の構成図で、説明している囲み部分の中で、ここでもまた要素という形で出てきている。「たくましく生きる力」を育成することによって「確かな学力」が育まれるという書き方をしているところがあれば、その逆になっている部分があって、繰り返し同じようなことが書いてあるところもある。事務局の迷いを感じられる。これを整理して一つにまとめて、矛盾のないようにするのが良く思う。確かな学力の構成図では、確かな学力があって、その周りにたくましく生きる力の構成要素があるわけだが、その境は明確ではない。例えば、「主体的な学習態度」のところと「かかわる力」や「うごく力」はすごくオーバーラップすると議論していたと思うの

で、囲っている実線を点線にするかなくすかした方が、もしかしたら分かりやすいかもしれない。

児玉委員長：構成図の「たくましく生きる力」と「確かな学力」の関係について、皆さんの意見をお願いしたい。自分としては、「確かな学力」という言葉は、約20年前のキーワードで、今は「生きる力」になっている。仙台市としてはそれに「たくましく」という付加価値を付けて、仙台市としての定義を出していたのだと思う。ただ定義を試みたけれど、そこがなかなかすっきりしていないということではないか。

佐々木委員：根本のところ、違和感がある。たくましく生きる力は、確かな学力の構成要素だったり、基盤だったりという話があったが、自分としては全く逆の印象がある。「確かな学力」は「たくましく生きる力」の構成要素ではないかと自分は強く思う。学力はもちろん大切だが、最終的に目指すゴールは、文部科学省でも言っている、生き抜く力である。仙台市はたくましく生きる力と表現しているが、やはりそういった子どもたちを育てていきたいのではないか。そのために、学力も必要だし、もちろんその他の要素も必要だということになるのだと思う。どうしても確かな学力が上位にあるような議論に違和感がある。この点について、皆さんと率直に議論したい。

児玉委員長：本日のこの議論で、一つの突破口になるかもしれないと思って持ってきた腹案がある。この議論の原因は、「生きる力」という文部科学省のキーワードと「確かな学力」という、かつての文部科学省のキーワードについて、同じ学力というカテゴリの中で関係を考えているから、整理がつかなくなっていると思う。学力という同じ土台で議論すると、双方向だという意見があったり、たくましく生きる力の方が上位概念だという意見があったりする。この議論は多分収集できない。再定義をする方法もあるが、それは難しいので、カテゴリを変更する以外はないのではないかと思う。つまり、「確かな学力育成プラン」である以上、「確かな学力」という言葉を前提とし、「たくましく生きる力」を学力と見るのではなく、育てたい子ども像として考えるのはどうかと思う。例えば、「たくましく生きる子ども」とか。最新の文部科学省の言葉からずれてしまうが、こうすることで、たくましく生きる子どもを育てるために、確かな学力があるというロジックにしてしまうという方法があると思う。ある種現実的な着地点ではないかと思っている。しかし、そうしても問題は出てくる。「生きる力」と表している文部科学省の学力観はどこに行ってしまったのだということになるが、「確かな学力」と「たくましく生きる力」が同じフィールドの中で関係性を位置付けるのが難しいのであれば、「たくましく生きる力」は学力と見ずに、到達すべき望ましい学習者像と考えるのはどうかと思う。一つの案として、事務局に持ち帰っていただくのはいかがでしょうか。稲垣副委員長は、これについてどう思われるか。

稲垣副委員長：このプランを成り立たせるためには、本当は「たくましく生きる力」をゴールとして定めた方がいいのではないかと半分は思っている。先ほど委員長からあった話の、「たくましく生きる子ども」については、ある意味こちらの方が学力論でいうと、生かすとか見通すとかは、いわゆる知識とかそういうものではなく、実際の人の姿を描いたものに近いので、扱い方としてはギリギリありかなと思うのと、でも「たくましく生きる力育成プログラム」があるので、その整合性がずれてしまうとも思う。仙台市教育構想2021を改めて見て、「たくましくしなやかに自立する人を育てる」という部分で、「たくましくしなやかに」はよく聞いていた気がするが、これまで、「しなやかさ」とか「自立する」というところは、どう扱ってきたか。

蓮沼室長：「たくましく」という部分は、「生きる」という言葉と相性がよく、よく使われている。「しなやか」というのは新しく出てきた感じがするが、柔軟に生きるという部分を強調しているのかと思う。多様化している社会で、様々な問題も解決しながら生きていく時代に「たくましく」ということは必要だが、柔軟に対応していく、協働していく、といった要素も加えて、「しなやか」という言葉が使わ

れているものと捉えていた。

稲垣副委員長：「しなやか」という言葉は、少し前から出てきていたかもしれないが、この「しなやかさ」はとても大事だと思っている。実はこの「自立」という言葉が入っているところで、そうだったかなと思って見ていたのだが、この辺を受け止めて考えたときに、どう見直していくのかということをごどこかに書いておくのも一つかと思う。仙台市教育構想 2021 に基づくことになっているので、上位概念として参考にしていくといいかと思う。

児玉委員長：「しなやかさ」は竹のしなりのイメージがある。強さだけでは折れてしまうが、しなやかさの要素があることによって、より強いものになるイメージになるので、「たくましさ」と「しなやかさ」はセットで一つの魅力的な学力、学習者像になるのかと思う。それを含めて検討して、構成図を考えてほしい。

佐々木委員：「たくましく生きる」「しなやかで自立」はとてもいいと思うので、重要度を高められるようにしてほしい。確かな学力を育成するために、「たくましく生きる力」が本当に欠かせない、全部を占めているものだから、「たくましく生きる力」の育成にしっかり取り組んでいくのだというメッセージになるべきなのではないかというのが、私の率直の感想である。その方が、市民の方々も、納得できるのではないかと思う。

児玉委員長：構成図の、小さくついている「たくましく生きる力」の部分の扱いを重くした方がいいのではないかというのが、共通しているところだと思う。

齋藤(亘)委員：「たくましく生きる力」とか「生きる力」という部分を見ると、「確かな学力」の他に、「豊かな心」「健やかな体」という要素もある。その三つのうち一つを取り出して、このプランの扱う範囲があって、他の要素のプランも扱う範囲があって、それが集約されて最終的には、「たくましさ」とか「しなやかさ」とかの育成を目指していくという捉えなのかと考えていたところである。「確かな学力」も今ではテストの部分だけではなく、生活とか将来に向けた学びということも含めた考えで学力を捉えていて、それが膨らんできた感じがする。そこで「たくましく生きる力」とサイズ関係が少し微妙になった感じがあるのだと思うが、やはり「たくましく生きる力」の要素から一つを取り出して議論しているというイメージなのだと思う。

児玉委員長：「たくましく生きる力」を中心概念でくくった方が落ち着く。これらの議論を踏まえて構成図をまた考えていただく。「カテゴリーを変える」「上位概念、下位概念のまま」「学力のままでいいから関係性を出せる」「たくましく生きる力をもう少し重く」というのが議論で出たところかと思う。

蓮沼室長：たくさんお話を伺って、「生きる力」がまず一番にあって、仙台市では、教育構想 2021 で「たくましくしなやかに自立する力」を育てていくと示している。そのために、子どもたちに「たくましく生きる力」を育てていくわけだが、それを支えていくための「確かな学力」の育成の部分、このプランでは示していく。「確かな学力」を育成するために、自分づくり教育等でも育てていく。ここがややこしくなっていくが、「たくましく生きる力」の5つの力がとても大事になってくるというイメージで考えている。

稲垣副委員長：国の政策の方向としての言葉のずれ感がある。結局同じ言葉を使っているがゆえの歯がゆさがある。ここから名前を変えようというのは難しい。仙台市教育構想 2021 の考え方も含めて、もっと大きく外側に、「たくましくしなやかに自立する」というのも記載して、その中で、「たくましく生きる力」もあるし、「確かな学力」もあるという形にするのはどうか。しなやかと自立はどこからくるのかという話になるかもしれないが、もう少し登場人物を増やしたらどうかというのが今のところの意見である。

児玉委員長：ここまでで結論は出ませんが、委員の声ということで概ね伝わったように思うので、それを踏まえた再修正、再検討を事務局のほうにお願いしたい。では図の問題、学力観問題については一段落させて、ここからは、A～Fまでの施策と本編との関係で議論したい。先ほど例えば、稲垣副委員長から、キャリアパスポー

トのことが総論の図の中に書いてあるが、各論のページのどこと対応するか説明不足ではないかという指摘があった。そういった類のことも含めて、意見をお願いしたい。

- 児玉委員長：本編4ページの(4)にコロナ禍の対応のことが記載されている。このプランは5年計画なので、5年後にはおそらくかなり回復していると予想される。さきほど申し上げた、ポストコロナ、With コロナをにらんだ学校の再生について記載したらどうかと思う。ICTに関連して。本編の第3章の三つ目、ICTの積極的な活用が23ページに記載されている。稲垣副委員長から、ここに情報活用能力の要素が入っていないという御指摘だったと思う。大量の情報を瞬時にデジタル処理するという情報処理の活用について文言を入れたらどうかと思う。一方で、35ページの上の段に「(3) ICTを活用した教育の推進」には、ねらいの2行目に情報活用能力という言葉が既に記載されている。そういった総論のところと、各論のところの整合性を図る必要があると思う。また、「個別最適な学び」「協働的な学び」が出てくる。主体的・対話的で深い学びに次ぐ最新のキーワードである。これがICTとの親和性が極めて高い。23ページには網羅されて記載されているが、35ページには、自らの学習を調整しながら粘り強く学習に取り組む態度を育成することが抜けている。その整合性を確認する必要がある。ICTに関しては、Bだけにあるのではなくて、CやAにもちりばめている方が基本方針らしい。各施策の基本方針がもっと生かされると感じる。
- 我妻委員：2ページに、SDGsとの関連ということで新たに付けていただいたのは良かったと思う。ただ、唐突感があるので、特にこの三つを育みたいという一文が入っていてリストアップされていると良いのではないかと思う。
- 児玉委員長：確かに、これだけたくさんあるうちの、これがなぜ選ばれたかっていう説明があるとよいだろうという指摘である。
- 佐々木委員：どことどこが一致しているかが分かりにくい。概要版を見て、さらに細かく見てみようという気持ちにさせるべきだろうと思う。先ほど、確かな学力の構成図の話があったが、それを考えると、本編の中身を結構変えることになるのではないかと感じた。1ページ目から、教育基本法とか仙台市教育構想2021などとどうつながっているか、触れていた方がいいのではないかと思う。20ページからの「確かな学力」と「たくましく生きる力」の関係性とか大幅な修正が必要になるかと思うが、うまくメッセージが伝わるようになることを期待している。概要版について、文字が多い感じがする。図を使ってとも考えられるが、図ではなかなか表せないところもあるから難しい。もっと大胆に切り詰めてもいいのではないかと感じる。全体的なバランスを考えた方がよい。
- 児玉委員長：全体像があって、それを構造化して見せるというのは、なかなか難しい仕事である。例えば、BとCとDは明らかに学校教育の問題、Eは家庭、Dは学校や家庭よりもっと大きく、地域を含んでいる。最後のFは、把握してまたフィードバックしていくためのもので、また別のカテゴリーになる。そのあたり、色分けも含めた何か工夫をしてもらいたいのかと思う。
- 佐藤委員：不登校のことについての記載ですが、どのあたりに詳しく書かれているのかを教えてください。概要版の方にも、パッと見てそういった感じのどことどこを結び付けてみたらいいか教えてください。確かな学力の構成図に関してだが、様々な意見があって、新しく考えた図だと思うが、親の目線で見たときに、以前の図の方が分かりやすかったという印象である。たくましく生きる力は以前の方が分かりやすかったと思うが、新しい図はちょっと伝えたいことがずれてしまったという印象を受けた。
- 蓮沼室長：対応する事業としては、「きめ細かな指導の充実」のところに入ってくる。また、「学習環境等の充実」で指導困難学級対策とかさわやか相談員といった生徒指導関係のことも記載しているが、明確に不登校についてはっきり触れているものではない。
- 佐藤委員：不登校という言葉はあまり好きではないので、その言葉を使うかどうかは別とし

て、パブリックコメントで出ていることは、おそらくどこに結び付くのかっていうのははっきり分からないのではないかと思います。説明してもらえると、さわやか相談員など、相談環境を整えるということがすごく直結していると思う。実際に不登校で悩んでいる保護者が触れたときに、もう少し不登校の児童生徒にも目を向けて欲しいなと感じるのではないかと思います。この学力育成プランに組み込んでいくべきかは分からないが、目を向けてもらっていると安心できるような一面があっても良いと感じる。

児玉委員長：心のケアを行うスクールカウンセラーから不登校の意を汲みなさいということでは説明としては弱いのではという指摘だろう。コロナ禍で不登校は全国で増加傾向だという記事があった。校長先生方も、不登校の児童生徒が増えたと思ってらっしゃると思うので、そこにも手を打っているということは何らかの形で記載していただいているのではないかと。制度や施策としてなかなか具体的なところまで踏み込めないにしても、配慮していることは伝える必要があるだろうと思う。

蓮沼室長：この確かな学力育成プランでどこまで記載できるかには限界がある。可能性として目先が変わるが、ICT活用のところでも、不登校の子どもたちであっても、学び続ける環境の保障をしていく、整備していくことは必要になってくるかと思うが、別のプランの「情報化推進計画」の方でも触れられている。実際、相談課の事業についても、連携しているものがあるので記載している。その他にも、連携していることが見えてくるといいのかと思う。どこまで盛り込めるか分からないが、つながりを見える化できるよう工夫したいと思う。

児玉委員長：教育委員会の業務分担について、市民の方はよくわからないが、しっかり連携しているということが私たちの答えになる。

我妻委員：AからEのリード文で、「施策について」「これまでの取組」「これからの方向性」「点検評価の視点」と4項目あるが、3の部分が「これからの方向性」と「今後の方向性」と記述が違う部分があったり、仙台自分づくり教育の全体像とか項目が変わっていたりとあるので、この辺りはそろえた方が良いと思う。2のこれまでの取組の量が多いので、2つに分けた方がいいのかもしれない。Fのところでの施策については、これまでというのがなかったので、これまでのことが、施策の中に入っているのかと思った。自分づくり教育のところが難しい。まず自分づくり教育が何なのかというのが分かりにくい気がする。概要のところでは「たくましく生きる力」がでてくる。この「たくましく生きる力」は自分づくり教育の中で育む力なのだと理解している人は、これがねらいだから、それに向けてプログラムを作っているのだという部分は分かると思う。しかし、それ以外の人にとっては分かりにくい感じがするだろう。また、学校現場でいうと、プログラムはプログラムで、それほどやっていないところがあるが、プランの一つ目にきている。そうであれば、やはり各学校で取り組んでいくのだという何かほしい感じがする。プランの一つ目に自分づくり教育の充実がきているが、そもそも自分づくり教育の充実って何だろうと考えていた。もしかしたら、キャリアパスポートなども入れ込みつつ、自分づくり教育が何か明確にし、そこで、たくましく生きる力を育てる、そして生きる力は何で、育成プログラムもあるというようになってくるとつながって見えて、見やすくなる気がする。遊びについて入れ込むのであれば、幼保小連携のところに入るのではないかと。小学校にスムーズに入るだけでなく、幼稚園教育、保育園でやっていた、遊びの中で学んでいくという仕組みを小学校は学ぶ必要があると常々思っている。小1になってリセットされて、生かされないという部分があると感じている。また、地域の中で遊ぶ場所を作っていく仕組みなども、コミュニティ・スクールで生かせることはできないだろうかと感じた。

児玉委員長：仙台自分づくり教育は、教育委員会にとっては一般名詞かもしれないが、市民からするとまだ固有名詞である。そもそもこれは何かということになるので、繰り返し定義を伝えていく必要があると感じる。オリジナルのものは何度も伝えていく必要がある。施策についての前に、仙台自分づくり教育とはという説明があつ

て、施策としてやっていることを記載する順番の方が組立てとしては読みやすく、分かりやすいかと思った。

鹿野委員：支援本部の立場でいうと、概要版では、Eで家庭や地域の学習環境の充実と書いてあって、地域の方が見たときに、地域の学習環境の充実って何するのだろうと思うが、本編の方は教育環境の充実と記載してあるので、こちらの方が分かりやすい。Dのスクールサポートスタッフについては、自分も関わっているので関心があるが、配置事業は各学校に任されているところがあると思う。教頭先生や事務の先生の仕事が増えて、大変だと思っている。支援本部が引き受けて、管理運営をしているところもあるが、それも何だかおかしい感じがする。市の方で何とかならないのかと思う。

児玉委員：この具体の意見を、書き込める範囲で書き込んでいただければというふうに思います。確かに教頭先生は大変です。

齋藤(亘)委員：22ページで、本市における確かな学力の要素のところ、しっかり読み込むと、学習指導要領よりプランの方が上位概念のようなニュアンスを感じる。確認してもらえればと思う。A～Eのリード文のところに、「4点検・評価の視点」というのが新たに追加されたので、このプランの各領域の状況が、このように評価できるということが示されて大変良かったと思う。一方で、Fにはそれがなくて、各領域の評価のもとになるものであるからないのかと思いつつ、学力を正確に測るために問題を検討しているとか、各領域の評価を適切に把握するための設問になっているのかという点検の意味では、検証の視点があってもいいのかと思う。

千葉委員：Eのところ、家庭と地域との連携・協働で、「家庭や地域の学習環境の充実を図ります。」という記載があるが、市教委の方で、地域の方の教育まで、関わっていくことになるのかという印象を受けた。また、家庭学習推進事業では、今年度から4年生にも家庭学習ノートを出しているとなっていて、継続となると、現4年生以下の子どもたちに対しては事業があるが、現在の5年生以上の子どもたちにはそういったものがないのかという印象を受けた。

児玉委員長：最初の質問は、教育委員会や学校がそこまでやるのは負担ではないか、そこまで書き込まなくてもいいのではないかという意味かと思う。ただ、何もしなければ、地域が学校と連携してくれないので、やはり学校がある程度方向性を示す必要があると思うが、そのあたりの書きぶりも検討いただければと思う。

4 連絡

(1) 今後の予定

事務局より、今後のスケジュールについて説明。

5 閉会

この議事録について、会議の内容と相違ないことを認める。

令和 5 年 / 月 16 日

第3期「確かな学力育成プラン」検討委員会

署名委員

齋藤 亘 弘